

佐々木巽先生を悼む

酒井 多加志

北海道地理学会の会長として北海道地理学会ならびに北海道の地理教育の発展に大きく寄与された佐々木巽先生は2008年初夏に体調を崩され、大学に勤めつつ治療に当たっておられましたが、翌2009年の12月12日に大腸癌により逝去されました。享年62歳でした。亡くなられる2日前まで大学で講義をされており、その余りにも突然の死を私はすぐには受け入れることができませんでした。葬儀の後、先生の研究室に入ったところ、机の上には翌週に行われるはずであった講義のノートとプリントが風呂敷に包まれて置かれており、先生がつい先ほどまでそこにおられたかのような様子でした。

先生は1947（昭和22）年12月8日に北海道静内町にお生まれになり、1974年3月に東京教育大学理学部を卒業し、同年4月に東京教育大学大学院理学研究科修士課程入学、1976年3月同大学大学院修士課程を修了し、同年4月筑波大学大学院地球科学研究科博士課程入学、1980年3月同大学大学院博士課程を単位取得退学されました。博士課程在籍中の1979年に私立暁星高等学校（東京都）非常勤講師に採用され、1980年3月に退職。同年4月北海道教育大学助手教育学部釧路分校に採用され、1982年10月に講師に昇任、1984年10月に助教授に昇任、1992年4月に教授に昇任されました。1996年4月からは北海道教育大学大学院を担当されました。

先生は北海道の海岸や湖沼、河川や湿原での地形変化について精力的に研究をされ、数多くの著書、論文を公にされました。湖岸微地形研究の第一人者であり、中でも屈斜路湖に発達する独特の湖岸地形が冬季間の湖面結氷に起因するアイスランパートであることを初めて認めました。アイスランパートについての研究成果をまとめた博士論文"Three-dimensional topographic change on the foreshore zone of sandy beaches"ならびに論文「屈斜路湖におけるアイスランパートの形態」（地理学評論58-6）は学会からも高く評価されるとともに、その実証的研究手法は湖沼研究の地理学からのアプローチの道を開くことになりました。なお、アイスランパートについては北海道地理60にも「アイスランパートと浜堤」として発表されています。近年は標茶町、弟子屈町、厚岸町の町史編さんにも携わり、"自然"に関する章を執筆されるとともに、研究対象を海外にまで広げ、マレーシアでの調査結果を「マレーシア・クチン市周辺の自然環境」（ESD環境教育研究11-1）としてまとめられました。専門分野の研究だけではなく、自然地理学の入門書を2編執筆されるなど地理学の普及にも貢献されました。

北海道教育大学の管理運営に関しては、各種委員会の委員長ならびに副委員長を数多く歴任されました。2003年8月からは代議員、国立大学法人化後の2004年4月から2007年8月まで評議員を務められました。2007年9月からは北海道教育大学副学長（釧路校担当）を務められ、釧路校のトップとして大学運営にあたられましたが、癌の発症により2008年7月に辞任されることになりました。この間、大学の法人化、再編・統合、改組に伴う数多くの困難な課題に取り組まれ、今日の釧路校の礎を築かれました。

以上の様に、先生は多年にわたり研究者として学術研究上多大な業績を上げられ、地理学に貢献されるとともに、釧路校の管理運営部門のトップとしての重責を担って来られました。また、一般市民を対象にした公開講座"ヨーロッパへの誘い"を道内各地で開講されるなど地域貢献にも積極的に関わり、



地域の学術文化の普及に大きく貢献されました。毎年自然地理学巡検を実施するなど学生の教育にも熱心であり、在職の29年間に輩出した200名にも及ぶ地理学研究室の卒業生は、教育界を中心に経済、行政などの分野でも活躍しています。大学ならびに地域の発展に貢献した功績は誠に顕著であるといえます。

在職中の突然の死であり、残された学生やご家族への想いはいかほどかと推量されます。ただ、告別式での在校生の次のお別れの言葉は先生の想いがしっかりと学生に伝わっていることを証明しています。

「どんなに困っている学生がいても決して見捨てず面倒を見続けるという先生の姿勢は教育者の鑑だと思います。そういう先生の姿を手本として、私たちは教師としての道を志していきたいと思います。最後まで心配やお手数ばかりかけてしまってすみません。そんな私たちでしたが安心してください。私たちは先生から学んだことを胸に刻み、社会に出ても恥ずかしくないような人間として、強く、先生のように優しく生きていきたいと思います。」

研究者としても、教育者としても多くの実績を残された先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。